加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>国際実験動物科学会議</td></tr>
<tr><td>英</td><td>International Council for Laboratory Animal Science（略　称 ICLAS）</td></tr>
<tr><td>団体 HP（URL）</td><td>https://iclas.org
（日本学術会議が加盟していることの記載　㊒　・　無　）</td></tr>
<tr><td>国際学術団体における最近のトピック
（学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td colspan="2">各国政府への動物実験ガイドラインの策定へアドバイス
動物実験倫理指針に掛かる国家レベルでのガイドラインは、必ずしも世界すべての国で既に充分に策定されている状況にはなく、ICLAS はそれら指針の無い国の政府などへの政策策定のアドバイスを行うことが期待されている。具体的には、2023 年にジョージア政府より依頼を受けて使節を派遣して助言するとともに、その後も具体的制度設計に関する継続的な意見交換を行った。この他にも、中南米数カ国（エクアドル、アルゼンチンなど）からも同様の打診を受けて対応法を策定している。

コロナ禍での動物施設運営維持指針の迅速な対応指針の提示
2020 年初頭にはじまった COVID-19 パンデミックの際には、ICLAS が担当する世界の実験動物科学とそのコミュニティーは、感染症対策医療技術開発において動物実験が担うべき中心的役割を担ったが、このための実験動物施設をコロナ禍での制限下で維持して機能させ続けるために、一時的に麻痺しかけた各国の実験動物運用体制を立て直すべく緊急の対応を迫られた。この世界的な喫緊の要請に応えるべく、ICLAS は下記の2つの対策を迅速に策定して実施し、世界的なワクチン開発のためなどの動物実験の機能維持に大きく貢献した。
<u>1）定期刊行のニューズレターを活用した実検動物施設運用指針の適時迅速な公表：</u> 2020 年3月 26 日発行の『ICLAS News』を通じて、COVID-19 の急拡大フェーズにおける動物飼育・実験施設の管理下動物の維持や、職務従事人員の業務継続体制に関する8項目の簡潔で効果的な運用指針をいち早く発出し、これが各国各種機関などの実験動物施設の緊急対策にとりいれられ、実験動物実施の継続にかかる混乱の回避に大きく貢献した。
<u>2）リモート業務体制整備への支援：</u>主に発展途上国では、 COVID-19 パンデミックに対応した動物飼育体制を維持するためのリモート環境整備が不十分であったにも拘わらず、それらを構築するための人的・経済的資源が著しく不足していた。ICLAS では、これらへの資金援助や体制構築と運用のための教育・支援を目的とした制度を策定して直ちに活用することによって、これらの国の実験動物環境の維持に大きく貢献した。

国際学術会議（ISC）活動との共働
1976 年より会員である国際学術会議（ISC:元 ICSU）の活動に積極的に参加している。2023 年 5 月のパリ（フランス）で開催された総会に代表（入來篤史副理事長・日本）を派遣して、同時に参加した動物実験を行う他の国際学協会との連携活動の発展を図るとともに、2024 年4月に開催のサンチャゴでの中南米地域総会には ISC からの要請に答えるかたちで代表（Micaela Ricca 理事・チリ）を派遣して、当該地域における ISC の活動に主導的役割を果たした。</td></tr>
</table>

当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例	**国際的な動物実験ガイドラインの発出（多研究分野に亘る基盤概念の確立）** ICLAS は、世界各国・地域の実験動物科学関連学会等を包括する上位組織として、国際標準となるべく、各種の観点からの動物実験にかかる指針・ガイドラインを発出している。近年では以下に列挙する指針等を公開し（<https://iclas.org/publications/> 参照）、これらは各国の動物実験の科学的レベルを担保する標準となって、動物実験によってもたらされる成果知見の品質の向上と世界に共通する結果の標準化に貢献している。現行の日本学術会議の動物実験ガイドラインもこれらの進捗を踏まえた改訂の検討が進められている。 1）CIOMS-ICLAS International Guiding Principles for Biomedical Research Involving Animals (2012) 2）Perspectives on the Role of Professional Laboratory Animal Science Associations (2017) 3）HARRP (Harmonized Animal Research Reporting Principles) (2018) 4）ICLAS LAQ Network for the Promotion of Animal Quality in Research (2022) 5）Genetic quality: a complex issue for experimental study reproducibility (2023) 6）The Case for Genetic Monitoring of mice and rats used in Biomedical Research (2023) さらに、2024年末を目処に進められているヘルシンキ宣言（ヒトを対象とする医学研究の倫理諸原則）の改訂に対応して、上記 1）CIOMS-ICLAS International Guiding Principles for Biomedical Research Involving Animals を改訂する準備が進められており、この実務遂行にあたってアジア地域の倫理観を反映させるべく日本からの貢献が大きく期待されている。 **ICLAS モニタリングセンターの運用（拠点を日本に置く）** ICLAS 創設に貢献した元日本学術会議実験動物研究連絡委員会委員長の野村達次博士の提唱による、世界に先駆けた実験動物の品質規格の概念を、実験動物の品質管理とモニタリングセンターシステムプログラムとして採択し、現在この本部を日本に置いて、動物実験データの信頼性・再現性向上をもたらす実験動物の品質の国際標準化に大きく貢献している（以降別項目下に詳述）。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等	**地域リーダー育成プログラムの推進と途上国リモートインフラ整備の援助** 世界各国から得られる実験動物を用いた医学生物学研究結果の信頼性の標準化を図るため、それを支える実験動物施設を運営する指導者を育成するために、各種の教育支援プログラムを整備して柔軟な運用を行っている。例えば、1）先進国実験動物学協会主催の教育プログラムへの途上国からの渡航参加支援フェローシップ、2)地域動物実験学協会からの依頼によってICLAS理事やエキスパートを派遣して行う現地教育指導、3）前述のコロナ禍への対応策として始めた途上国実験動物施設でのリモート教育支援環境整備の拡充、などが挙げられ、それぞれ着実に実績を積んでいる。 **国際認証システムの世界各地域事情との調整** 動物実験倫理や、動物実験を用いた医学生物学研究水準の、向上と世界

	標準化の観点から、現在国際的な認証制度を策定する動きが進んでいる。例えば、英米圏が主導する AAALAC International（The Association for Assessment and Accreditation of Laboratory Animal Care International/国際実験動物ケア評価認証協会）などは、国際的枠組みの研究費の申請/獲得の必須条件になりつつある。しかし、この運用法や認定基準は、我が国を始め非欧米圏の社会文化や価値観とは必ずしも完全に一致しない側面も一部指摘されている。これらの建設的な調整を図るために、全世界組織としての ICLAS およびその主要な構成員としての日本の役割への期待は大きい。 **動物実験の概念拡張と新たなガイドラインの策定** 世界各国の様々な研究機関などにおいて、動物実験によるヒトへの直接適用可能な種々の治療法の開発や創薬が進んでいるが、特にヒトの精神機能の発達と老化や社会ストレスへの心理的反応に関する研究には、既に整備が進んでいる齧歯類を対象とした研究に加えて、我が国が主導的に進めている遺伝子改変を含む霊長類を用いた新概念の研究が不可欠である。その実現のためには、ヒトに近縁の霊長類研究に対応した新たな動物倫理規範の策定が急務であり、世界各国・地域の実験動物科学関連学会等を包括する上位組織として、ICLAS はこの新概念のガイドラインの策定と世界への普及に中心的役割を担うことが期待されている。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例	**実験動物学国際機構創設への貢献** 1956 年の ICLAS 創設は、元日本学術会議実験動物研究連絡委員会委員長の野村達次の提唱による、世界に先駆けた実験動物の品質標準規格化の概念にもとづいて、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）の呼びかけに IUBS（国際生物学連合）と CIOMS（国際医学団体協議会）が応じたことで実現した。当時、世界各国によって基準がバラバラであった実験動物の品質を標準化して相互比較可能にすること無しには、動物実験の品質に大きく依存することになる、その後の医学生物学や創薬研究の発展を見ることはなかったであろう。このように、その創設に大きく貢献した日本がその後の ICLAS の運営に継続的に理事・役員を輩出してその世界的展開を主導してきており、引き続き将来に亘っても新時代の世界の実験動物学コミュニティーの発展へのさらなる貢献が期待されている。 **ICLAS モニタリングセンター** 上記の野村達次の提唱による、世界に先駆けた実験動物の品質規格の概念を、実験動物の品質管理とモニタリングセンターシステムプログラムとして現実化し社会実装するために、当時の途上諸国（韓国：Korean Research Institute of Bioscience and Bio Technology, タイ：Mahidol 大学）にサブセンターの設置をもたらした。現在この本部(ICLAS モニタリングセンター)を日本に置き、日本学術会議基礎医学委員会 ICLAS 分科会の活動として国内関連分野にも周知しており、動物実験データの信頼性・再現性向上をもたらす実験動物の品質の国際標準化への発展が期待されている。この ICLAS モニタリングセンターは公益財団法人実験動物中央研究所(現：公益財団法人実中研）内に設置され（センター長は ICLAS 理事で同分科会委員の林元展人）、2023 年には国内のアカデミア、製薬企業の実験動物施設のサンプルを中心に 32,359 検体の微生物モニタリング検査を行った。こ

	こで得られた知見を元に韓国、タイ、台湾、インドなどアジア各国を中心に広く啓蒙活動を行い実験動物の品質の向上に大きく貢献している。また、実験動物分野は市場規模が小さく、市販の検査キットが少ないため、ICLAS モニタリングセンターが検査試薬（抗原、抗体、PCR 陽性コントロールなど）を作製し、上述したアジア各国をはじめ諸外国の機関に頒布しており、各国の検査の重要な検査インフラの一端を担っている。2023 年には韓国に抗原プレートを 639 枚, タイに 160 枚, そして台湾に 383 枚を検査用抗体とともに頒布した。また、ICLAS モニタリングセンターは ICLAS が運営する検査技術の自己評価プログラム(Performance Evaluation Program: PEP)の運営に関し、中心的なラボとして参画しており、標準標本の作製や様々なコンサルテーションを行うことにより、世界規模で実験動物の微生物モニタリング技術の向上に大きく貢献している。 **CIOMS-ICLAS ガイドライン策定** 1985 年に CIOMS（国際医学団体協議会）と共同で発出した CIOMS-ICLAS International Guiding Principles for Biomedical Research Involving Animals の前回 2012 年の改訂にあたっては、日本から笠井憲雪博士が担当委員として参加し、日本学術会議が 2006 年に発出した「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」英語版が引用されるなど、東洋をはじめとする欧米以外の倫理・価値・規範の観点をとりいれることに貢献した。前回の改訂から10年余りを経て、現在その再改訂が検討されており、動物実験の運用に大きく依存する日本の医学生物学創薬研究の国際標準との互換性を担保するためにも、引き続く日本の関与が極めて重要である。 **The Mühlbock-Nomura（野村）Award の制定** 2013 年、ICLAS 創設に貢献した野村達次博士の貢献を称え、世界の研究において、遺伝学的および微生物学的に精選された高品質の実験動物を使用することの価値を高めることに貢献した研究者を、4年に1名顕彰するこの実験動物学分野の世界最高賞を制定し、2015 年には伊藤守博士が受賞した。
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化	国際的社会環境が現在大きく変化しつつあるなかで、各国の動物実験倫理に関する考え方や、国境をまたぐ実験動物流通のサプライチェーンの構造など、動物実験を用いる医学生物学創薬研究の基盤が、日本国内にあって感じられるよりも遙かに大きく欧米の価値観主導のかたちで急激に変化している。これらの実情を認識して日本国内の諸体制がこれらへ対応するために必要なリアルタイムの情報収集には、ICLAS のような国際組織での対等な議論に積極的に常時参加していることが不可欠である。 このような、欧米主導による世界標準形成（例えば、前述の国際認証制度の影響力の拡大など）に向けた現在の大きな潮流のなかにあって、異なる文化的背景を持つ我が国をはじめとしたアジアなどや他の非欧米の文化圏の考え方を反映するような提言を主導し、我が国の影響力を示して行使することが、日本にとって世界でのリーダシップを確立することに大きく貢献するものと期待される。 このような状況下にあって日本社会や我が国諸学協会のメリットを追求し担保するためには、ICLAS のように世界中の官・学・産に亘る会員組織が一致協力して本会ミッションを遂行している組織は、実験動物学の各専門領域を超え

	て、動物飼養保管等基準の軌道を踏み外すことなく生命科学研究を科学的・倫理的に適正な方向へと導き、医療イノベーションを例に我が国の国民生活の向上への直接的な貢献が期待できる。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	ICLASは2004 年に開始した新プログラムにおいて、実験動物の品質管理とともに動物実験の科学的・倫理的適正化に関する国際協調を目標に掲げて6種類のガイドラインを発出し、国際医学団体協議会（CIOMS）と協働して国際動物実験倫理原則を 2015 年改訂した。このように ICLAS は、社会的・文化的背景や関連法令の違いを踏まえた国際協調によって、実験動物のユーザー研究者をも広く支援する国際組織となっている。このようにな ICLAS の活動は、実験動物を用いる広範な科学研究領域の基盤を支えるものであり、IUPS（国際生理科学連合）、IUPHAR（国際薬理学連合）、IUIS（国際免疫科学連合）などが ICLAS の正規構成員（Union Member）として、学際的な活動を担っている。 さらに、これらの理念に基づいて、発展途上国における実験動物の品質と動物実験の科学的・倫理的水準の向上を図りつつ世界標準化を促進するために、先進国の先端研究機関との研究および飼育支援人材交流、国際会議への派遣／招聘、各種教育プログラムや資格認定制度の実施など、多岐に亘る奨学金や事業支援のための資金援助などを、ICLAS 地域委員会を通して現地のニーズをもとにした柔軟な運用体制を構築して実施している<https://iclas.org/about-us/>。

2　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）	総会・理事会を持ち回りで世界各国／地域の実験動物学会と連携するかたちで開催しており、日本開催・招致をする可能性を日本実験動物学会と検討中。
日本人の役員立候補等の予定	現在、全 16 名の理事定員中、日本学術会議 ICLAS 分科会委員長の入來が副理事長、同委員の林元が理事を務めており、次回 2027 年改選時にも引き続き日本から立候補する予定である。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き	ICLAS は、世界各国・地域の実験動物科学関連学会等を包括する上位組織として、異なる文化圏の価値観を包括し調和した実験動物の品質や動物実験倫理にかかる世界標準を策定すべく、各種指針を検討している。 とくに、近年特に注目されている、人間の心身メカニズム研究のための霊長類長期介入研究の不可欠性を盛り込んだ、新しい動物実験倫理基準の提案を目指して、霊長類の固有種が棲息しこの分野の研究が特に進んでいる日本が、ワーキンググループを主導して素案を検討中である。 より具体的には、近く予定されている CIOMS-ICLAS International Guiding Principles for Biomedical Research Involving Animals の改訂に向けて、日本／東洋の価値観をこの国際基準に反映させるべく、日本から担当委員が参加して主導的役割を果たす予定である。

3　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="4">総会・理事会・各種委員会等の状況（過去５年間及び今後予定されているもの）</td><td>総会開催状況</td><td>2019 年(開催地:ﾌﾟﾗﾊ･ﾁｪｺ)、　2020 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、
2021 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、　2022 年 (開催地:ﾏﾙｾｲﾕ･ﾌﾗﾝｽ)、
2023 年 (開催地:ｿﾙﾄﾚｲｸｼﾃｨ･ｱﾒﾘｶ)、以降未定・調整中
ICLAS 総会は、傘下の会員学会の地域振興と国際ネットワークへの参加の涵養のために、それらと併催する形で毎年世界各地で持ち回りで開催している。</td></tr>
<tr><td>理事会・役員会等開催状況</td><td>2019 年(開催地:ﾌﾟﾗﾊ･ﾁｪｺ)、　2020 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、
2021 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、　2022 年 (開催地:ﾏﾙｾｲﾕ･ﾌﾗﾝｽ)、
2023 年 (開催地:ｿﾙﾄﾚｲｸｼﾃｨ･ｱﾒﾘｶ)、以降未定・調整中
上記総会に先だって開催地で理事が一堂に会して、毎年1回包括的な議論をおこなっている。これに加えて、下記の各種委員会および地域委員会から提案される事業や、世界各国会員の活動状況に関し、随時メールにて理事会審議･承認を行う体制を整えている。
＜役員会＞
役員会（理事長・副理事長・事務局長・財務理事の4名で構成）は毎月1回乃至2回、日本選出の副理事長の主宰によって、リモートで定期的に、日本から選出の副理事長がこれを主催する形で開催している。</td></tr>
<tr><td>各種委員会開催状況</td><td>2019 年(開催地:ﾌﾟﾗﾊ･ﾁｪｺ)、　2020 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、
2021 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、　2022 年 (開催地:ﾏﾙｾｲﾕ･ﾌﾗﾝｽ)、
2023 年 (開催地:ｿﾙﾄﾚｲｸｼﾃｨ･ｱﾒﾘｶ)、以降未定・調整中
地域（大陸）別委員会、機能別委員会などの各種委員会は、上記総会開催時にそれぞれ一堂に会して開催するとともに、随時オンラインおよびメールによる審議を行って、機動的な活動を継続している。</td></tr>
<tr><td>研究集会・会議等開催状況</td><td>2019 年(開催地:ﾌﾟﾗﾊ･ﾁｪｺ)、　2020 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、
2021 年(ｵﾝﾗｲﾝ開催)、　2022 年 (開催地:ﾏﾙｾｲﾕ･ﾌﾗﾝｽ)、
2023 年 (開催地:ｿﾙﾄﾚｲｸｼﾃｨ･ｱﾒﾘｶ)、以降未定・調整中
ICLAS は、総会等の各種会合を傘下の会員学会の地域振興と国際ネットワークへの参加の涵養のために、それらの研究会／年次総会等と併催する形で毎年世界各地で持ち回りで開催しており、ICLAS 役員や理事がそれらの地域学会におけるシンポジウムや各種行事に積極的に参画して、科学的水準の向上などそれぞれの地域に合った形での貢献をする体制をとっている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</td><td>2023 年　総会／研究集会（ｿﾙﾄﾚｲｸｼﾃｨ･ｱﾒﾘｶ）60人（入來篤史）
2022 年　総会／研究集会（ﾏﾙｾｲﾕ･ﾌﾗﾝｽ）　３人（入來篤史）
（但し現地対面参加者のみの数）
2019 年　総会／研究集会（ﾌﾟﾗﾊ･ﾁｪｺ）　20人（入來篤史）
併催地域会員学会の土地柄や形態によって日本人参加者数に変動があるが、日本人理事・役員は必ず参加して地域振興に努めており、世界各地における日本およびその研究水準のプレゼンスの確立向上に大きく貢献している。</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去５年）</td><td>役職名 | 役職就任期間 | 氏名 | 会員、連携会員の別</td></tr>
<tr><td>副理事長 | 2019～2026 | 入來篤史 | (25,26 期) 会員・連携</td></tr>
<tr><td>理事 | 2019～2026 | 林元展人 | (25,26 期) 会員・連携</td></tr>
<tr><td>理事 | 2015～2019 | 入來篤史 | (23,24 期) 会員・連携</td></tr>
<tr><td>ICLAS モニタリングセンター長 | 2014～現在 | 林元展人 | (25,26 期) 会員・連携</td></tr>
<tr><td>出版物</td><td colspan="2">１　定期的（年 12 回 ）　主な出版物名　ICLAS News Report
２　不定期（　　）　主な出版物名
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載
（https://iclas.org/about-us/）　直近（2023 年）総会の年次報告（含：会計）・監査報告を添付</td></tr>
</table>

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条、４条、５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規４条第３号）</td><td>委員会名</td><td>基礎医学委員会 ICLAS 分科会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>入來篤史</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
第一回分科会（令和6年4月1日；オンライン開催）
1.役員(委員長、副委員長、幹事)の選出、特任連携会員の委嘱
2. ICLAS の現状と国際学術会議との連携状況の共有
3. 本分科会の今期の活動方針の検討

第二回分科会（令和6年5月29日；ハイブリッド開催）
1. 対面形式は JALAS 会場にて開催、
2. 動物実験に掛かる国際環境への対応、
3. 国内関連学協会等との連携、
4. 野生動物、展示動物の扱い、国際認証システムとの連携、
5. ICLAS 理事長との意見交換

この他、令和６年７月１０日、ICLAS Jussi Helppi 理事長の来日と ICLAS モニタリングセンターの視察に際して、当分科会委員が同行して ICLAS 活動の現状や将来計画およびそれらへの日本の動物実験学コミュニティーとの連携強化などについての緊密な意見交換を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">内規第３（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
①. 該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載（https://iclas.org/about-us/）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）

①. 該当する　　２．該当しない

※根拠となる資料の添付又は URL を記載（https://iclas.org/about-us/）</td></tr>
<tr><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

㋑ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="3"></td><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
①．該当する　　２．該当しない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">加入国数及び主要な各国代表会員を10 記載</td><td>（　53 ヶ国）</td></tr>
<tr><td>・各国代表会員名／国名
・Ministry of Science and Innovation / Spain
・Ministry of Agriculture / Hungary
・Swedish Research Council / Sweden
・National Research Council / Italy
・Ministry of Health and Welfare / Korea
・National Research Council of Thailand / Thailand
・National Health & Medical Research Council / Australia
・The Royal Society of New Zealand / New Zealand
・National Council on Research / Brazil
・National Academy of Sciences / U.S.A.</td></tr>
</table>

（参考）
国内関係学協会（主要９団体）
日本実験動物学会、日本生理学会、日本解剖学会、日本薬理学会、日本神経科学学会、日本心理学会、日本獣医学会、日本動物心理学会、日本免疫学会